

平成22年度 宇都宮大学 全学FDの日

1. 日 時 平成22年9月29日(水) 10時00分から

2. 場 所 大学会館2階 多目的ホール
(工学部アカデミアホールに映像配信)

3. 日 程

【全学FDシンポジウム】

- 10:00 挨拶(学長 進村 武男)
- 10:05 講演「なぜ今、共通教育の改革か」
(理事(教育・学生担当) 石田 朋靖)
- 10:30 講演「教養部から共通教育の実施体制へ」
(理事(企画・広報担当) 渡邊 直樹)
- 10:55 講演「共通教育の改革—どこからはじめるのか?」
(学長特別補佐 塚本 純)
- 11:20 休憩(5分間)
- 11:25 質疑応答

【個別FD活動】

13:30 午前のシンポジウムの内容を踏まえ、各学科、コース等のカリキュラム単位で、以下の内容について意見交換を進め、今後の予定について検討し、確認する。

1. 「共通教育から基盤教育へ」の意識化と教職員間の共通認識
2. 基盤教育と専門教育の位置づけ
3. 23年度一部実施、24年度完全実施に向けての検討予定と検討組織の確認、特に23年度一部実施に向けての具体的な取り組みについて

目 次

- 講演「なぜ今、共通教育の改革か」
（理事(教育・学生担当) 石田 朋靖) 1
- 講演「教養部から共通教育の実施体制へ」
（理事(企画・広報担当) 渡邊 直樹) 4
- 講演「共通教育の改革—どこからはじめるのか？」
（学長特別補佐 塚本 純) 6
- あらたな「共通教育」の骨子 13

なぜ今、共通教育の改革か

宇都宮大学
第2回 全学FDの日

2010.09.29

理事・副学長（教育・学生担当）
石田 朋靖

これからお伝えすること

教養教育を巡る今までの流れ
教養・共通教育の危機
教養教育の必要性を議論するための題材
社会的背景
いま求められる教養とは
求められる中身
基盤教育への変更により目指すもの
“骨子”の骨子
個別FDへのお願い

なお、教養教育と一般教育（≒共通教育≒基盤教育）の関係等は渡邊先生のプレゼンで紹介

教養教育を巡る今までの流れ（1）

1949 新制大学発足：旧制高校と旧制大学の合体
旧制大学⇒専門学部 専門課程で専門教育
旧制高校⇒教養部 教養課程で一般教育

民主的な市民の育成

人文科学、社会科学、自然科学の三系列

アメリカ型：教養教育は大学教育の中心に近い

専門教育は大学院でという傾向

ヨーロッパ型：教養教育は高校段階

大学は専門教育を行うという傾向

ソクラテスに始まりゲーテで終わる伝統的な教養教育の考えが、家庭も含めて社会全体で教養人を育てるという理想（高等教育ジャーナル(北大)、第1号1996)

問題の指摘

教養課程と専門課程の接続性、一般教育の画一化
初年次での修学意識の低下、学部改革への支障、
専門の方が“上”とみる風潮・不利な教養部教員
（⇐ 実利優先による専門偏重と教養軽視？）

教養教育を巡る今までの流れ（2）

1991 大学設置基準の大綱化
一般教育と専門教育の区分廃止
授業科目区分ごとの履修義務が撤廃

“大学独自の理念に基づくカリキュラム編成”の下で
4年一貫の教育を指向する教育改革

本来は一般教育の軽視ではなかった。むしろ教養教育の重視とアメリカ型“リベラル・アーツ教育”的な学士課程教育を意図（国立大学の目指すべき方向 国大総2008.3）

1995前後 全国の国立大学で教養部解体の流れ
既存学部への分属and/or新学部創設
しかし“一般教育”がなくなっただけではない。
全学共通科目、全学教育科目、基礎教育科目、
普通教育科目などと名前を変えて継続

教養教育を巡る今までの流れ (3)

- 大綱化以降に繰り返し強調される教養教育の重要性と提言
- ・大学審議会「21世紀の大学像と今後の改革方策について」(1998)
 - ・大学審議会「グローバル化時代における高等教育の在り方について」(1999)
 - ・中央教育審議会「新しい時代における教養教育の在り方について」(2002)
 - ・中央教育審議会大学分科会「我が国の高等教育の将来像」(2005)
 - ・中央教育審議会「21世紀型市民」の育成を目指す新しい教養教育
 - ・中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて」(2008)
 - 「学士力」を教養教育の観点から捉えなおす必要性
 - 総合的・汎用的能力の形成の重要性
 - ・日本学術会議「21世紀の教養と教養教育」(2010)



- 教育改革が当初の意図通り進んでいない
- 現代社会に必要な教養の中身や教養教育の在り方の混乱
- 「民主的市民の育成」という観点が弱まり、より実践的・実用的な観点が重視。知識や能力が重視？ 学士力、社会基礎力・・・

教養教育を巡る今までの流れ (4)

教養・共通教育の存在そのものの危機
 国立大学協会「国立大学法人における教養教育に関する基礎調査報告」(2006)
 国立大学協会「国立大学の目指すべき方向」(2008)

- (1) 学士課程教育における教養教育の位置付けが曖昧
 履修の規則性が崩壊 不明確なカリキュラム ⇨ 医学部
- 大学：実質的に削減する大学も少なくない
 学生：教員：目的意識が不明確⇒乏しい意欲
- 「教養・共通科目」の中から×××単位を履修のこと
 - 宇大では・・・自発的・学部の選択専門科目を教養教育科目と認定
 - “教養” とするには無理な他学部専門科目を形式的に教養科目に
- (2) 教員の意識 教養部解体による専門主義？
 専門教育が重要で教養教育を面倒な業務と看做す傾向
 教養教育を積極的に取り込むインセンティブが不足
 具体的な教育方法や内容の改善が進まないこと
- (3) 不明確な実施組織・責任体制
 全学出動だが“教養・共通教育を手立”という意識
 元教養部の教員の退職
 教養教育の改善が全学的取組となっていない

教養教育の必要性を議論するための題材 (1)

- 教養教育の必要性を認識しなければ、どんな改革も効果が小
 - 学士課程教育そのものにかかわる問題
1. 人格の形成、社会の基盤である“市民”という観点
- 価値観が混沌とした時代 → 大きな社会的変動
 - 家族や地域社会、企業の内り方と個人との関係が変化
 - 情報洪水とヴァーチャル社会
 - 科学技術万能主義の崩壊・・・
 - 個人、社会が自信や展望を持ちにくい時代
 - 社会全体に漂う自覚喪失感や閉塞感
 - 自我の確立、自ら学ぶ意欲の希薄化
 - まじめに努力して何かを身に付けていくことを軽んじる風潮？
 - グローバル時代
 - グローバル化とローカル化の両者が絡み合った複雑多様な課題
 - 三新しい時代に求められる教養
 - 自らの立ち位置を見極め、進むべき目標を考え、目標の実現に向けて主体的に行動していく力
 - 三新しい時代に求められる教養

教養教育の必要性を議論するための題材 (2)

2. 専門職業人育成という観点
- “文系”であっても、自然科学への理解は不可欠
- “理系”でも、人間や社会への理解が必要 例えは、
- 境界領域や総合的領域への対象拡大からの必要性
 - 職場からの要請 高い専門性と幅広い知識・教養
 - 企業経営の分ける技術者、技術の分ける経営者⇒MOT
 - 専門職業人の責務からの必要性
 - 科学・技術の功罪を理解 倫理観、人間や社会の理解
 - 専門分野を客観視し社会に位置づける座標軸
 - 専門知識は社会の中での部分的な知「全体知」の必要性
- 中等教育科目の種類や内容の減への対応
- 体系的な基礎科目の未習

個々の先生方自身、更には、それぞれの専門分野の単位で、教養教育の位置付けを考えていただきたい

いま求められる教養とは

教養＝自分の生きる座標軸

社会との関わりや経験、体系的な知識や知恵を獲得する過程で身に付ける、ものの見方、考え方、行動の基準、価値観の総体。

グローバルで変化の激しい現代社会の中で、地球規模の視野、歴史的視点、多元的視点で物事を考え、未知の事態や新しい状況に的確に対応していく力。具体的には、

- (1) 文化や社会に関する知識、その多様性を理解する資質・態度
- (2) 科学リテラシーと科学技術の功罪についての正確な理解力や判断力
- (3) あらゆる問題に対するクリティカル・シンキングの能力
- (4) コミュニケーション能力、知的活動の基盤となる国語力
- (5) 情報リテラシー、数量的スキル、論理的思考力、問題解決能力
- (6) 市民としての社会的な責任と倫理
- (7) 主体性・向上心を持って新たな創造に向かう自己管理能力
- (8) 他者の立場に立って考える想像力とリーダーシップ

専門教育も含め学士課程で身につける教養

新しい時代における教養教育の在り方について (2002)
学士課程教育の構築に向けて (2008) などから



基盤教育への変更により目指すもの

○教養科目を再構成

本来の教養科目が維持できる、ぎっちりとした枠組み
選択方法の見直し

内容の整理・組み換え・充実

○初年次教育・キャリア教育の再構築

内容は十分か？

○専門基礎教育やリメディアル教育を可能とする枠組み

二専門導入科目

○学生の幅広い選択を保证する時間割

○ここが保証されないと、本来の選択が形骸化

○責任ある実施体制の再構築

1000人の学生が34単位取得する大組織の責任体制

基盤教育の持つ意味を全構成員が理解する必要

皆さん全員の意識変革

“どこかで誰かが、キットやっつけていく” ことはない



個別FDで議論して頂きたいこと

基盤教育について

- 何のための教養教育
- カリキュラムポリシー上での基盤教育の位置づけ
- 教養教育に対する基盤・専門教育の役割分担
- 後のプレゼンでお願いされる内容

専門教育について

- カリキュラム・マップの再確認・修正
(学習・教育目標の達成確認表)

各教育プログラムごとでプログラムの学習・教育目標(達成目標)と各科目の到達目標の整合性を見直し。必要に応じて目標を変更することも含頭に。

全ての学習・教育目標と特に強く関わる科目は稀。(卒論などは全てと特に強く関わる可能性大)



第2回全学FDの日に

大学設置基準の大綱化と

教養部から共通教育委員会へ

渡邊 直樹 (企画広報)

1

共通教育（教養教育）を考えることの難しさを改めて実感

FDテーマ：なせ今、共通教育（教養教育）改革か

宇都宮大学は、「3方針」の連結による教育内容の見える化と質の向上」を目標として、教育改革の取り組みに着手した。各学部での議論の中で専門課程の「見える化」が進むにつれ、「共通教育（教養教育）」の位置づけの不明かさが明らかになってきた。

教養部時代から現在に至る「共通教育（教養教育）」の在り方の変遷を再確認し、今、なぜ共通教育改革か、何をどこまでやるのかを「共通教育」から「基礎教育」へ、を考える。

○私に与えられたテーマ：

教養部時代から現在に至る「共通教育（教養教育）」の在り方の変遷を再確認し、

従って、

ここでは「教養とは何か、そして教養教育とは何か」という議論の場ではなく、新しい事象（リメティアル教育とキャリア教育等）に対応するべく共通教育の枠組みと内容を再度整理し実施体制を強化するための基礎共有の場と認識

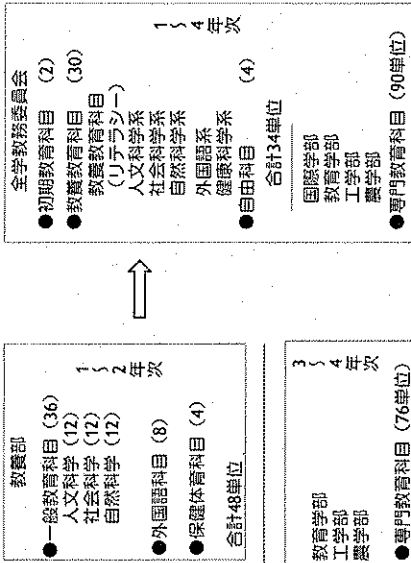
D 2

1991年7月大学設置基準の改正・大綱化と宇都宮大学

1. 専門教養の充実
 - ・ 一般教育科目 (48単位) と専門教育科目 (76単位) の区分を廃止
 - ・ 高度化、個性化、活性化
 - ・ 4年一貫の教育課程編成
2. 実施組織（教養部）の改組
 - ・ 組織の解体か
 - ・ 新学部の設置か 一宇都宮大学国際学部 (1994)
3. 教養教育とは何か、一般教育とは何かの理念
 - ・ 学部基礎か
 - ・ 教養教育（幅広い知識と深い教養）か
 - ・ 両者の役割を包含 一共通教育 (34単位、理念・概念としては括りきれない)
 - ・ 初期教育科目の導入
4. 実施体制
 - ・ 全学出勤体制 (但し、外国語と人文社会科学系は国際と教養学部、情報と自然科学系は工学部と農学部が責任をもつ)
 - ・ 宇都宮大学共通教育実施委員会

D 3

国際学部設置と共通教育



D 4

手附宮大学の改革の特徴

- 1 科目区分が廃止されたが、教養部担当の一般教養科目、外国語科目、保健体育科目の3科目を従前とおり教養教育科目として実施
- 2 関連科目の多様化：
・従来の科目区分では包摂できなかった新規科目（学際的、テーマ別、ジャンル別等）を複合的科目として設置
・情報化へ対応した情報科目の設置
・導入科目としての初期教育科目
- 3 教養部が廃止されたため、担当責任部局がなくなった：
・全学委員会組織となったこと及び規程改正により教養課程構成が柔軟化され教養教育の履修が4年一貫となったと同時に形骸化も
・全学教育担当体制による確立化
（専門部会・分科会共通教育担当教員の固定化）
- 4 ゼミスター制の導入と1科目2単位化（一部例外）
- 5 外国語履修単位の削減（いわゆる第二外国語の選択化）
- 6 共通教育における専門基礎的科目の学部専門教育科目への移行
- 7 各学部による柔軟な履修形態（教養教育科目）

現在の見直しの必要性及び観点

中期目標・計画、学長の経営方針2009

- ...現代社会に必要なリテラシー、幅広い教養、社会人基礎力や自己実現能力、さらに実践的な専門性と問題解決能力を身につけた人材を育成
- ...共通教育センターが中心となり...初期導入教育、リテラシー教育、教養教育、キャリア教育からなるカリキュラム内容を充実...全教員による担当体制
- きめ細かな学生支援（学修・生活）

共通教育に必要な新規科目

- キャリア教育科目
・2011年度「社会的・職業的自立に關する支援等」（大学設置基準）
・キャリアデザインへのサポート「就業力の育成」
・企業求める人材像の変化
- リメディアル教育科目
・高大連携
- グローバル化への対応
・留学生40万人計画
・量と質の担保、ケア体制、就職

「共通教育」の改革 —どこからはじめるのか?—

教育改革推進子—ム
塚本 純

I. 基本的な認識と改善方向(1)

1. 基本認識(「骨子」から)

「教養教育」は学士力の基盤となり、専門教育と補完し合い学士課程教育を形成するものであり、宇都宮大学としては、より良き「教養教育」の維持・改善に努める。

教養の育成：生涯に培う“教養”の契機

- 「共通基礎教養(学術会議)」として、中核は基盤教育において行われる
- 専門教育も含めて行われる?
- 専門基礎教養、そして専門教育を通じた教養の育成(その学問を通じて、如何に生きるべきかという問い)

⇒改めて「基盤教育」と「専門教育」を考える

宇大での基盤教育と専門教育(1)

基盤教育：

- 大学教育への導入
- 基盤としてのリテラシー
- 教養の形成の中核。共通の基礎教養。人文・社会・自然の三系列をカバーする広がりと総合性。
- 専門教育の導入・基礎としての役割。

専門教育：

- 専門知識の伝授と専門的素養・能力の系統的形成
- 専門の社会的意義の理解や自らの生き方との関わり
- 専門分野を相対化でできる(分野の限界など)能力や専門外の人間にも伝えられる能力
- 教養の形成をも担う“専門教養教育”

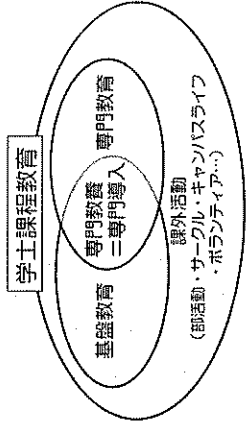
* 専門基礎教養：基盤教育と専門教育の重なり合い

宇大での基盤教育と専門教育(2)

専門基礎教養：基盤教育と専門教育の重なり合い

“当該専門分野の素養に欠ける学生でも積極的に取り組める内容がほしい”

- 人文社会系学生への科学的リテラシー育成
- 理系学生への社会的科学的リテラシーや人文的素養



基本的な認識と改善方向(2)

2. 改善の方向(「骨子」)

まず第一段階として、共通教育の枠組みの整理、実施体制の整備の二点を重点的に実施する。

- 石田・渡邊両理事の報告内容、またこれまでの取り組みをふまえた改革案について、上の二点を中心に「骨子」の要点をお話します

参考：法人化以後の改革

- ①「キャリア教育」の導入、②「担当学部制」の導入
- ③「共通教育センター」の設置、④「共通英語」改革、など

II. 基礎教育のカリキュラム

教育改革に伴う「基礎教育」履修表

科目区分	授業科目名	必修 科目	選択 科目	卒業に必要な 単位数
初期導入科目	初期セミナー(仮称)	2		2
	英語	8		8
リテラシー科目	スポーツと健康	2		2
	情報処理基礎	2		2
教養科目	人文科学系科目			34
	社会科学系科目			
	自然科学系科目			
	健康科学系科目			
	外国語系科目			
	キャリア関連科目		12~16	
基礎キャリア教育科目	キャリア関連科目			4~8
専門導入科目	自由科目			

*「教養科目」と「専門導入科目」の合計は20単位とし、内訳は指定の範囲内で学部の事情により決定。留学生対象のリテラシー科目は取組は行っており

○枠組みとしての科目区分整理(内容改善の第一歩)

→ 今後目指すもの

- ・ 「リテラシー科目」については説明を割愛いたします
- ・ 主な変更は、「初期導入教育」と「教養教育」(とくに「共通基礎教養」や「専門基礎教養」)に関わる点です。

「初期導入教育科目」(2単位) ⇔ 「初期導入科目」(2単位)

「教養教育科目」(20単位) ⇔ 「教養科目」「基礎キャリア教育科目」「専門導入科目」(合計20単位)

* 実質は2~④~14単位の設定、12単位以内の自由選択科目を含めて20単位

- ・ 以下項目ごと、<「骨子」の内容>、<検討中の課題>、<今後の展開>、<今後「基礎教育七カ方」等<可能性を検討>を説明します

II-1. 「初期導入科目」

- 「初期セミナー(仮称)」と「導入キャリア教育」を核に再構成
- ・ 「初期セミナー(仮称)」(2単位：必修)
 - * 大学教養全般への導入形態を統一、実施は学部・学科ごと
 - * 「導入キャリア教育」は、当面ここに組み入れて実施

<検討中の課題>

- ・ 「初期セミナー(仮称)」授業内容(シラバス)指針の作成

参照：(別紙、1)「フレッシュマンセミナー」

<今後の展開>

- ・ 「導入キャリア教育」を科目として独立
- ・ 「初年次教育」として内容の拡充(全学共通の内容として)
 - ①日本語表現、文章法、②食と健康、など
- ・ 基礎教育センターによる教科書作成など(教育内容の保証)

Ⅱ-2. 「教養科目」

- 「教養科目」の定義を明確にしたい
- 「教養科目」(12~16単位：選択)
 - * 幅広い人間性の養成、「世界」の理解
 - * 教養教育の中核としての「共通基礎教養(学術会議)」
 - * 専門教育の基礎とは異なる
- <検討中の課題>
- ・ ぎっちりした枠組みで「教養科目」を再構成
- ・ 当面は人文・社会・自然の「系」として
- ・ 専門科目から適切な科目を選び教養科目へ開放(履修表に明示)
- <今後の展開>
- ・ 「教養科目」内容の充実
 - ①人文科学系・社会科学系・自然科学系コア科目(文系のための理系教育、理系のための文系教育)など②テーマ別での「系」の整理、③副専攻プログラム、など

9

Ⅱ-3. 「基盤キャリア教育科目」

- 社会的・職業的自立に向け、必要な知識、技能、態度を育成するための科目として「教養科目」から分離し新たな取り組みとして明示
- * 「導入キャリア教育」(必修)と「キャリア創造科目」(選択)で再構成
- ・ 「導入キャリア教育」は、「初期導入科目」の中で実施
- <検討中の課題>
- ・ 「キャリアデザインノート」の活用
- ・ 専門教育でのキャリア教育と基盤キャリア教育との連携
- <今後の展開>
- ・ 科目「導入キャリア教育」の開設

10

Ⅱ-4. 「専門導入科目」

- 専門を学ぶ体系的基盤としての「専門基礎教養」や、リメディアル教育を可能とする枠組みとして新設
- ・ 「専門導入科目」(4~8単位：選択必修or必修)
 - * 専門教育へつながる基盤
 - * 必要に応じリメディアル教育や体系的な基礎教育など
- <検討中の課題>
- ・ 履修表の改訂・単位数の確定(学部への依頼)
- <今後の展開>
- ・ “「専門基礎教養」は、「当該専門分野の基礎的素養のない学生でも積極的に取り組むことのできる内容構成と方法により行われることが望ましい」という考え方について

11

Ⅲ. 実施体制の整備

- 1) 科目担当体制の整理
 - ・ 科目内容に応じた科目担当体制
- 2) 時間割の整理
 - ・ 時間割上で「基盤科目」枠を設定する
 - * 学生の幅広い選択を可能とするため
 - 3) 責任ある実施体制の再構築
 - ・ 全学担当体制の強化
 - * 「センター」、「専門部会・分科会」、「共通教育連絡会」と「学部」の機能・責任と相互の関係性を整理
 - ・ 基盤教育の企画・開発機能の強化

12

Ⅲ-1. 科目担当体制の整理

- 科目内容に応じた科目担当体制とする
- * 全学担当体制での実施と学部・学科ごとの担当の整理
＜検討中の課題＞

・ 受講見通しに基づき開講科目数・内容などを調整する仕組み、内容・形態にあった受講者数決定の方法など

Ⅲ-2. 時間割の整理

- 「基盤科目」は、主に1・2年次において履修できる
よう、時間割上で「基盤科目」枠を設定する。
* 学生の幅広い選択を可能とする。

＜検討中の課題＞

- ・ 「基盤科目」枠ただき台の提示（今後学部の検討をお願いすること）

13

Ⅲ-3. 実施体制の再構築

- 基盤教育の全学担当体制と企画・開発機能を強化
＜検討中の課題＞

・ 実施と企画開発を保證する全学的組織整備

- * 「担当学部」、「部会」の維持と機能強化
- * 基盤教育の運営を全学的にコーディネート・調整する組織の整備 → 「基盤教育運営会議（仮称）」
- * 基盤教育を企画・開発する組織の整備
→ 「基盤教育企画委員会（仮称）」
- * 基盤教育センターへ専任教員を配置（とくに初期導入・教養の企画担当者）

参照：（別紙、2）「基盤教育運営組織図（案）」

- ・ 各学部担当コマ数の設定
- * 全学担当体制の実質化と学部ごとの適切な分担へ

14

2010年9月29日
教育改善推進チーム

フレッシュマンセミナー(シラバス) (案)

【授業内容】

大学の教育環境への適応、学生の自己確認・自立・自律、および基礎的なスキルの習得を図ります。

【学習・到達目標】

以下の6点を目標にします。

- (1) 学生生活や学習習慣などの自己管理・時間管理能力を身につける。
- (2) 大学という場を理解する。
- (3) 人として守るべき規範を理解させる。
- (4) 大学における人間関係を構築する。
- (5) レポートの書き方、文献検索法、プレゼンテーションなど、大学で学ぶための基礎的な学習スキル(スタディスキル)を身につける。
- (6) ロジカルシンキングなどの思考法や相互理解・合意形成のためのコミュニケーション方法など大学で学ぶための技法(アカデミックスキル)を身につける。

【授業の内容】

上記の6つの目標・目的を達成するために盛り込むことが望ましい内容(例)は、以下の通りです。

- (1) 大学での学び(オリエンテーション)
 - 学びの動機付け
 - 学科(講座)のカリキュラムポリシー、ディプロマポリシーの解説
 - 専門分野の解説
- (2) 日本語演習
- (3) ノートテイキングとリーディングの技法
- (4) レポートの書き方
- (5) *プレゼンテーションの技法
- (6) *参考資料の検索と整理
 - 図書館の利用法を含む
- (7) 心とからだの健康
- (8) 科学の方法
 - 帰納・演繹、分析・総合

なお、(5)(6)は、「情報処理基礎」の授業内容に含めてもよい。

- (9) キャリア形成(導入キャリア教育として、基盤キャリア教育の一端を担うもので、キャリアデザインノートをテキストとして用いる)
 - 将来の職業や進路選択に関する動機付け・方向付け

- (10) コミュニケーション能力の育成
 - グループ学習としてのPDCAサイクル実践
 - 厚生補導行事における自己紹介や質問力実践

- (11) 自分のための履修プラン作り
→キャリア形成を踏まえた計画的履修案内
- (12) 受講態度や礼儀・マナー

【授業計画（例）】

* 「ワープロ・表計算・プレゼンテーションソフトの使い方」「参考資料の検索と整理（図書館の利用法を含む）を除いた（「情報処理基礎で」対応）授業計画の例

第1回、2回：大学での学び

- 学びの動機付け
- 学科（講座）のカリキュラムポリシー、ディプロマポリシーの解説
- 専門分野の解説

第3回：キャリア形成（導入キャリア教育として、基盤キャリア教育の一端を担うもので、キャリアデザインノートテキストとして用いる）
→将来の職業や進路選択に関する動機付け・方向付け

第4回：自分のための履修プラン作り

- キャリア形成を踏まえた計画的履修案内

第5回：ノートテイキングとリーディングの技法

第6回：日本語演習

- 日本語文章の書き方、日本語の話し方

第7回：レポートの書き方

第8回：プレゼンテーションの技法

- 聞かせる・見せる・分からせるプレゼンテーションの方法
（プレゼンテーションソフトの使い方ではない）

第9回：科学の方法

- 帰納・演繹、分析・総合

第10回、11回、12回：コミュニケーション能力の育成

- グループ学習や簡単なプロジェクトとしてのPDCAサイクル実践

第13回：厚生補導（行事）における自己紹介や質問力実践

第14回：心とからだの健康

第15回：能動的・自律的な学習に向けて（まとめ）

- 大学生活における自己管理・時間管理の指導を含む

基盤教育運営組織図(案)

別紙. 2

2010/9/29

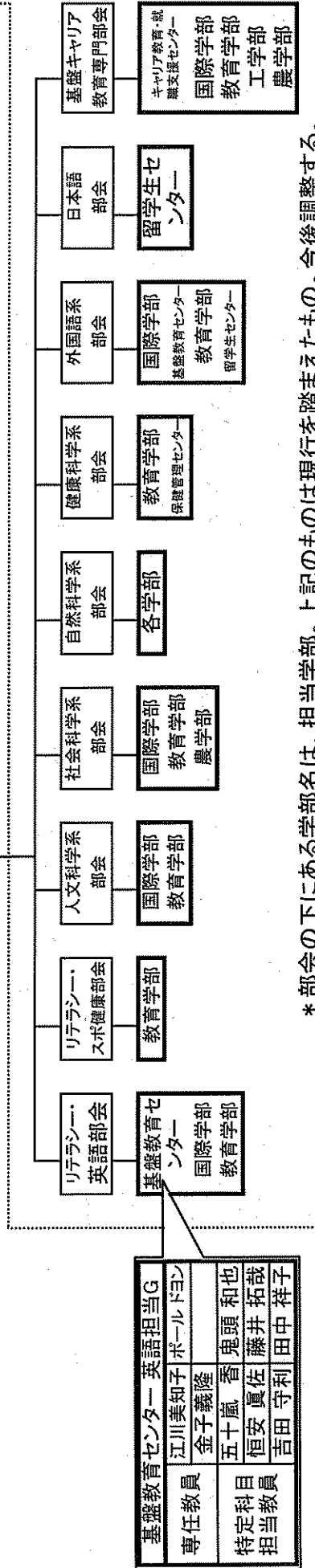
基盤教育センター

委員長 (学務理事)	石田 朋靖
委員	〇〇 〇〇
副委員長	〇〇 〇〇
国際学部	〇〇 〇〇
教育学部	〇〇 〇〇
工学部	〇〇 〇〇
農学部	〇〇 〇〇
生涯学習教育研究センター長	〇〇 〇〇
基盤教育センター長	〇〇 〇〇
学務部長	〇〇 〇〇

センター長	深見 元弘
専任教員	江川 美知子
専任教員	(△△ △△)
兼任教員	リテラシー部会長
兼任教員	スポーツ部会長
兼任教員	人文部会長
兼任教員	社会部会長
兼任教員	自然部会長
兼任教員	外国語部会長
兼任教員	日本語部会長
兼任教員	キャリア部会長
兼任教員	専門職教員
兼任教員	教務委員(国)
兼任教員	教務委員(工)
兼任教員	教務委員(農)

センター長	深見 元弘
専任教員(企画・開発担当)	江川 美知子
専任教員(企画・開発担当)	(△△ △△)
専任教員(企画・開発担当)	(△△ △△)
兼任教員	教育企画会議委員
兼任教員	教育企画会議委員
兼任教員	教育企画会議委員
兼任教員	教育企画会議委員

企画・開発担当 (初期導入 or 教養等)
 リテラシー(英語)担当
 リテラシー(スポーツ)担当
 人文科学系担当
 社会科学系担当
 自然科学系担当
 外国語系担当
 日本語担当
 基盤キャリア教育担当
 情報処理基礎担当
 初期導入・情報・専門導入担当(全学教務委員会議(学部選出)から各学部1名選出)



* 部会の下にある学部名は、担当学部。上記のものは現行を踏まえたもの。今後調整する。

あらたな「共通教育」の骨子

2010. 8.5 教育企画会議

I. 基本的な認識と改善方向

「教養教育」は、学士力の基盤として専門教育と補完し合って学士課程教育を形成するものであり、宇都宮大学は、「宇都宮大学の理念と目標」と「教育目標」に、その重要性を掲げてきた。こうした認識の下、より良き「教養教育」の実施に向け、一步ずつ改善に努めていくことが不可欠と考える。

「教養教育」の充実については社会からの要請も高く、宇都宮大学では、教養部廃止以降「教養教育」を「共通教育」として全学出動体制で取り組んで来た。こうした「共通教育」を、学内組織や教員の変化、教育予算・人的資源の削減の中にあっても維持・充実させ、学生の資質や社会の要請に対応した教育内容に改善する実施責任体制を整備することは、本学にとって重要な課題である。特に、「教養教育」を維持・改善する第一歩として、まず目的が明確となる「共通教育」枠組みの再構成と、継続的に実施が可能で実効性のある「共通教育」体制の構築は急務と考える。

宇都宮大学の理念と目標

宇都宮大学は、広く社会に開かれた大学として、質の高い特色ある教育と研究を实践し、人類の福祉の向上と世界の平和に貢献することを基本的な目標としています。

1. 幅広く深い教養と実践的な専門性を身につけ、未来を切り開く人材を育成します。
2. 持続可能な社会の形成を促す研究を中心に、高水準で特色のある研究を推進します。
3. 地域社会のみならず広く国際社会に学び貢献する活動を積極的に展開します。

<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/outline/rinen.html>

宇都宮大学の教育目標

専門に関する基礎を身につけ、広い視野とバランスのとれた判断を可能にする豊かな人間性を持った人材の育成をめざします。

1. 現代社会に必要なリテラシー（素養）、幅広く深い教養と豊かな人間性を身につけるための教養教育を行います。
2. 実践的で専門的な知識を修得するための専門教育を行います。
3. それらのふたつを有機的に結びつけた4年一貫教育により、未来を切り開く知力と行動力を持ち、新しい時代に活躍できる人材を養成します。

1. 基本認識

*以下では骨子を四角で囲む。

- 「教養教育」は学士力の基盤となり、専門教育と補完し合い学士課程教育を形成するものであり、宇都宮大学としては、より良き「教養教育」の維持・改善に努める。

2. 改善の方向

- まず第一段階として、共通教育の枠組みの整理、実施体制の整備の二点を重点的に実施する。

「初期導入科目」、「リテラシー科目」、「教養科目」等からなる共通教育の枠組みのコンセプトは、本来先進的なものであり、現在の他大学の例と比べても遜色あるものではない。しかし、度重なる枠組みの変更や追加により、分かりにくいものとなりつつある。また、高校までの教育内容の弱体化等に伴って必要となった（「理系基礎教育」に象徴される）リメディアル教育、あるいはキャリア教育など、以前にも増して必要性が増しつつある教育に対し、対応しにくい枠組みの構成になっている。

また、責任ある「共通教育」を維持・改善するには、科目の担当体制に加え、科目群のコンセプトに基づき科目構成等の調整や改善を進める責任体制などが不可欠であり、こうした体制を再整備しておく必要があることは言うまでもない。加えて、どのような優れたカリキュラムができたとしても、その受講を保証するような体制、すなわち時間割が適切でなければ、「共通教育」の実効性は極めて小さい。

Ⅱ. 「共通教育」 枠組みの整理

1. 「基盤科目」へ名称変更

- 「共通教育科目」から「基盤科目」へ名称変更する。

幅広い人間性や基礎的素養を養成する基盤的な教育であること、必ずしも全学で共通の内容ではないこと等を明示するため。

2. 科目区分の整理

- 「基盤科目」総単位数は34単位を維持し、科目区分を目的に対応させ整理する。
- 全学共通の内容で実施する科目と学部・学科等ごとの内容で実施する科目に分類する。

基盤教育の目的を明確化し、個別的内容がふさわしい科目は学部・学科等ごとの内容で実施する。

- 新たな「基盤科目」は、
 - 「初期導入科目」(2単位：必修) ——学部・学科等ごとの内容
 - *大学教育全般への導入
 - 「リテラシー科目」(12単位：必修)
 - *基盤としてのリテラシー
(英語^{*}、スポーツ) ——全学共通の内容 ※外国人留学生にあっては日本語も含む(以下同じ)
(情報) ——学部・学科等ごとの内容
 - 「教養科目」(12～16単位：選択) ——全学共通の内容
 - *幅広い人間性の養成、「世界」の理解
 - 「基盤キャリア教育科目」 ——全学共通の内容
 - *社会的・職業的自立に向け、必要な知識、技能、態度の育成
(キャリア創造科目+導入キャリア教育)
 - 「専門導入科目」(4～8単位：選択必修あるいは必修) ——学部・学科等ごとの内容
 - *専門教育へつながる基盤。必要に応じリメディアル教育や体系的な基礎教育など

*「教養科目」と「専門導入科目」の単位数合計は20単位とする。「専門導入科目」の単位数は、学部・学科等ごとに4～8単位の範囲で定め、残りは「教養科目」として履修する。

3. 「初期導入科目」

- 大学教育全般への導入を行う「初期セミナー(仮称)」を「初期導入科目」として全学必修とし、各学部・学科等で実施する。

初期導入科目は大学教育全般への導入であるから、学部・学科等別ごとの内容で個別に実施する(現在の「初期セミナーB」に相当)。現在の「初期セミナーA」の内容は、「教養科目」として開講する。

4. 「リテラシー科目」

- 「情報処理基礎」= (全学で定める共通内容) + (学部・学科等ごとの個性的内容) と整理し、個性的部分は、学部・学科等ごとの裁量に委ねる。実施は学部・学科等ごとの責任で担当する。

英語、「スポーツと健康」は当面大きな変更はせず、実施において見出される課題への対応にとどめる。将来的には論理的思考や文章表現などを含む“日本語再入門”のような科目が必要となるかも知れない。

5. 「教養科目」

- 履修単位数を12～16単位確保し、全学担当体制の下で実施する。

教養教育充実の観点から。

- 従来のテーマ別科目、複合系科目も含め、テーマ別で再整理する。

人文・社会・自然・健康・外国語・複合等の系に別れている科目群の趣旨を分かりやすくする。

- 第2外国語の科目区分を組み替え、「教養科目」として開講する科目は各外国語について2単位に精選する。
- 「教養科目」として開講する外国語を、履修実態に合わせ変更する。

第2外国語を必修とする学部が国際学部のみとなる状況変化や履修実態から。「教養科目」として開講する以外の科目（4単位分）は専門教育に関わる科目として扱い、「専門導入科目」あるいは「専門科目」として国際学部が開講し、他学部生は「教養科目」として受講する。

- 「専門科目」を他学部・他学科等に「教養科目」として履修させる制度を改善し、実効性あるものとする。「専門導入科目」についても、適切な科目と判断される場合には他学部・他学科に開放する。

現在でも、「他学部の専門教育科目」等を「教養教育科目」として選択履修することは可能となっており、対象科目は履修案内巻末に提示されている。しかし、あまりに形式的で、責任ある「教養科目」とは考えられない。実効性をあげるため「教養科目」として適切な科目を精選し、履修表に明示する。他学部学生の履修は専門教育を妨げない範囲で実施する。「教養科目」として開放する「専門科目」および「専門導入科目」は、各学部と調整する。

6. 「基盤キャリア教育」

- 大学教育全体におけるキャリア教育のうち、基盤教育として行う教育を「基盤キャリア教育」とし、①1年次に行う全学共通の「導入キャリア教育」（必修）、②選択で履修する「キャリア創造科目」（選択科目）の2つから構成する。
- 「基盤キャリア教育」は、全学共通の内容をキャリア教育・就職支援センターと学部が連携して企画・開発し、全学担当体制の下で実施する。

基盤教育、専門教育どちらとも関わる広範な内容のキャリア教育の整理が必要である。

- 「導入キャリア教育」は全学共通の内容で、当面1年次の他授業科目の一部に組み入れる形で入学者全員に実施する。

全員への必修科目として実施する事は現段階で無理と考える。組み入れる科目の候補として、(先に提示された)必修化された場合の「初期導入科目」が考えられる。

「基盤キャリア教育」のうち、独立した授業科目（選択）を「キャリア創造科目」とし、現行の「キャリア創造科目」、「自由科目」を発展的に整備する。

7. 「専門導入科目」

- 専門を学ぶ体系的基盤としての「専門導入科目」を、「基盤科目」として新設し、それぞれの学部・学科ごとに責任を持って担当する。履修単位数は4～8単位とする。(単位数は学部により考慮の余地あり)

専門を学ぶ上での体系的基盤が必要とされているが、これは初期導入・教養科目などとは異なる基

盤である。将来的な発展を見通し、独立した科目区分として「基盤教育」に位置づける。学部専門科目ではなく、あくまで「基盤科目」として扱う。学部・学科等での必要に応じリメディアル教育や体系的な基礎教育なども含むうる括りである。

専門の基礎となる体系的科目を学部ごとに選定する。科目・履修単位数（4～8単位）および履修方法は、「基盤教育センター」と調整の上、学部が決定する。

Ⅲ. 「基盤教育」実施体制の整備

1. 内容による実施体制の整理

- 全学共通の内容で実施する科目は、基盤教育センターやキャリア教育・就職支援センターが企画・開発・調整し、全学担当体制の枠組みで実施する。
（「リテラシー科目（英語、スポーツ）」、「教養科目」、「基盤キャリア教育科目」）
- 学部・学科等ごとの内容で実施する科目は、それぞれの学部・学科ごとに責任を持って担当する。
（「初期導入科目」、「リテラシー科目（情報）」、「専門導入科目」）

全学担当体制の運用においては、受講見通しに基づき開講科目数・内容などを調整する仕組みや、内容・形態にあった受講者数決定の方法などが検討課題である。

2. 履修年次の整理

- 「基盤科目」は、主に1・2年次において履修できるようにする。そのために、時間割上で「基盤科目」枠を設定する。1年次では「基盤科目」の履修を原則とし、特定の曜日等以外には、1年次対象の学部専門科目を開講しない。

目的は、「基盤教育」の全体像を学生に見えやすくし、また「基盤科目」履修の自由度を上げることにある。「基盤教育」に充てる日は、学期・学年の進行によって減少する。こうした措置は、“くさび型教養教育”を実質的に保証する手段でもある。

実施の際には、「基盤教育」に充てる日数や2年次での「基盤科目」履修の日の設定、さらに1年前期は履修単位数のCAPを30単位に上げ、後期以降は成績優秀者のみ30単位とするなどの措置を含め柔軟に検討する。

3. 基盤教育実施組織の整備

- 「基盤教育」を実施する組織整備のため、「基盤教育センター」、「専門部会・分科会」、「共通教育連絡会」の機能・責任と相互の関係性を整理する。
- 「基盤教育センター」の体制・機能を強化し、企画・コーディネート機能を充実する。
- 全学担当体制の実質化と学部ごとでの適切な分担を図るため、各学部担当コマ数を設定する。

全学担当体制による「基盤教育」の実質化が目的である。名称変更する「基盤教育センター」の体制・機能を強化するためには、学士課程教育を俯瞰できる教員の配置（専任教員や兼任教員など）が必要である。学部との密な連携を取りながら、「基盤教育」実施の企画・コーディネート機能を充実し、専門部会の活性化・実質化を図る。

なお、全学担当体制は、必ずしも全員担当体制ではなく、年齢や経験も含め専門教育と「基盤教育」の担当を学部等で適切に判断する必要がある。